

山びこ通信



しぜん イタリア語 ラテン語 ウェブプログラミング
歴史 ギリシャ語 かが 調査研究 理科 数学
ことば つくる ユークリッド幾何 山の学校ゼミ(社会)
英語 かず フランス語 ロボット工作 漢文 ロシア語

学んで時に之を習ふ、亦説ばしからずや

——根気強く学び続けるために大切なもの

文・山下太郎

親として子どもの学習をどう支援すればよいか。私は、親こそ復習の大切さを伝える人であってほしいと思います。親は他人に先んじて何かの知識を子に与えるのではなく、本人が「できた」と思い込んでいる「何か」について、本当にわかっていると言えるのか？ 本当にできたと言えるのか？ 本人と一緒にいてねいに確認してほしいのです。

漢字で言えば、先生にマルがもらえる答案がかけたからそれでよい、という価値観ではなく、同じマルでももっと丁寧に書けるはず、と言ってとめやハネに気をつけて書き直すように指導できるのは親を置いて他にだれもいません。(学校の先生は一人の子にそこまでつきあえない)。先へ、先へ、というのが時代の風潮なら、後ろへ、後ろへ、というのが親の合い言葉であるべきです。

もちろん、先へ先へも大事なのですが、その合い言葉は放っておいても耳に入り、人を不安にさせます。だからこそ、家庭ではバランスをとるためにも足下を固めることの大事さを語ってほしいと思うのです。飛ぶ前にしゃがめ、と言いますように、しゃがめばこそ、自力で飛躍する力を蓄えることができるでしょう。

幼稚園児や小学校の低学年であれば、ちょっとでも新しい事を知っている自分を「偉い」と勘違いする傾向があります。どうしても背伸びの姿勢になり、足下がふらついています。私の述べていることは、放っておいても子どもは背伸びしたがるので、親は「足下を見なさい」と基礎の大事さを気づかせる人であってほしい、ということです。

その日の復習でもよいし、一年前に習ったことでもよいのです。必ず何か新しい発見があります。大げさな言い方をすると、その発見を親子で喜び合う空気作りが肝心です。今これに気づかなかつたら後々たいへんになるね、今わかってよかったね、と。間違っても、なぜこの子はこんな簡単なミスをするのだろう、と思ってもなじってもいけません。すべてをぶちこわします。

先に進みたいという情熱のほとばしりを押さえる必要はありません。押さえるふりをすることが教育の極意です。これは前回の巻頭文で書いた「レス・イズ・モア」の考えと通じます。「家では先取りの学習はしなくてよい。それより学んだことに穴があいていないか。一年前に習ったことは大丈夫か？」と問うべきです(本音としてどんどん予習のできる子どもになってほしいとしても)。この言葉には一理あります。先取りを抑制すると、学校の先生の言葉を集中して聞く生徒になります。言い換えると、先取りをやりすぎると先生の話の聞かなくなる恐れがあります。(次項へつづく)

(前項のつづき)

この話題に関して、私には忘れがたい経験があります。小学校のいつの頃だったでしょうか、父に毎朝漢字の書き取りをしてもらっていました。そのとき、自分の名前を書けと言われたことが一度ありました。「ふくざつ」という漢字を出題され、正確に書いて答えたのですが、父は私の指先の一瞬のためらいを見逃しませんでした。父いわく「それでは正解ではない」。「できたことに違いはない」と私。「では、自分の名前を書いて答えよ」。「そんなことは簡単だ。ほら、このとおり」。「よろしい。では聞くが、さっきの問題は、今のと同じくらいすらすらと答えられたのだろうか」。

子どもなりに「一本取られた」と思いました。この経験を通じ、私は安易に「できた」と言わない(思わない)子になりました。以後の勉強において、「できる」の基準が俄然厳しいものになりましたが、それは今から思えばありがたいことだったと思います。

最後にタイトルの言葉について一言述べます。「学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや」とは、『論語』の冒頭を飾る言葉です。「復習することは楽しい経験だ」と孔子は述べています。私が上で「復習」の大切さを語ったのは、それが学びの楽しさに直結することを自分の経験に照らして実感するからです。山の学校の掲げる「楽しく学べ」(Disce libens.)のモットーも、この文脈で理解していただけると幸いです。

(文責 山の学校代表 山下太郎)

『会員の声』

(2012年9月～10月)

山の学校では、息子二人小四の兄はかず、小一の弟はしぜんでそれぞれお世話になっています。

山の学校との出会いは、の前に私達家族には幼稚園との出会いがありました。幼児教育からはじまる山下先生の教育に対する想い、人として幼児教育がいかに大事であるかという節目節目での園長先生のお言葉は、親として我が子にどう成長してほしいか親としてどうあるべきかという問いに沢山のヒントをいただきました。息子が小学校に入学すると同時に山の学校へも通い始めました。理由は、山下先生が山びこ通信にも書かれている内容で、「学ぶことを楽しむために」とあります。親として、山の学校で学んでほしいことがこの言葉全てにあるからです。学力は結果であり、学ぶ楽しさが自然と身につければ結果つながるものが必ずあると思っています。

幼稚園時代先生に手をひかれお友達と登って登園したお山への石段を今は一人力強く山の学校へ目ざして石段を登る姿をとてたくましく思っています。(M.H.さん・保護者)

ぼくがしぜんにかよっていて、一ばんたのしいことは、はっぴょうするじかんです。みんながもってきたものや、つくってきたものとかをみんなにはっぴょうするじかんがだいすきです。(M.H.君・しぜん1年)

ぼくがかずに通っていて楽しいことは、学校では習わないかすのいろんな事が学べることです。ぼくが一番面白いと思ったのはモノポリーです。(M.S.君・かず4年)

昨日もお山から帰ってきて、何やら裏紙メモをいっぱい出してきて、計算機を片手に、『早くお風呂入りなさい』と私が言っても、『ちょっと待って…』と言いながら、ひたすら、何かやっていました。

そして、今朝、朝御飯食べているときに、私に一生懸命問題を読んで、『中学生になるまでに、答えができればいいんやけどな…』と、言いながらも、自分なりに理解したところを、私に説明するのですが、私の方が一回聞いただけでは、朝から頭が働かないものですから、『う～ん』と考えていたら、多分、亮馬先生がこうやって、説明されたんだろうなあ～という口ぶりで、あの円盤を、手で切った紙に数字を書いて、『これを円盤とするやろう…』と言って、説明してくれました。

その説明を聞くと、思わず私もやってみたくなる気持ちにさせられてしまいました。たぶん、亮馬先生から、問題を投げかけられた時に、子供たちもなんとか、この答えを出してやろう…謎を解いてやろう…という気持ちになって、子供たちも必至で頭を働かせるのでしょね。それが、後から聞くと、学校で習っている大きな数字の勉強につながっていたり、法則を見つけていたり…なんですね。私に説明する時も、『ここ見て!』なんか法則がみえてくるやろ…? と偉そうに説明していました。

私が見つけた法則は、娘が教えてくれた法則とは、違ったのですが、私も64まで、確かめきれないないので、法則…とかいえませんが…。お母さんと考え方が違ったから、『ちゃんと紙にまとめてよ…』って言ったら、私に説明したことで、ちょっと満足しているのか、『また、時間があればな…』と言っていました。夏休み前の大きな数の計算の時も、亮馬先生が言われていたように、レポートにできたら、たいしたものなのですが…。ちょっと、欲張りすぎですね(笑)でも、私にここまで説明して、理解させてくれるのは、親バカながら感心しています。外でもこれだけしゃべれたら…って、いつも思っているのですが。

こんな、説明ができるのも、ずっとお山の学校に通わせていただいているからだ、いつも、いつも思っています。(N.S.さん・保護者)

● 発見の名人たち (Aクラス)

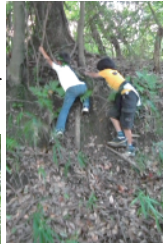
Aクラスの5人の仲間たちは、生き物を愛し、また、体全体を使うことが大好きです。石段や園庭、森の中を駆け抜けながら、矢継ぎ早に発見の声を上げます。現在、その活動力と発見力を生かし、「しぜんクラス いきもの図鑑」を作る計画が進行中です。昆虫や草花についての、みんなの発見の数だけ、ページは増えていきます。さあ、どうなるでしょうか。



木々の逞しさを手足で感じながら、みんなにとっての「特別な場所」は増えていきます。



「木の根っこかなあ。う〜ん!!!」暫しの格闘の後「…これ以上はやめとこう。木がかわいそうだから」と呟き、勝負は引き分けに。



よし、ガケを上るぞ!

「手がハサミになってる!」セミの抜け殻に新発見。

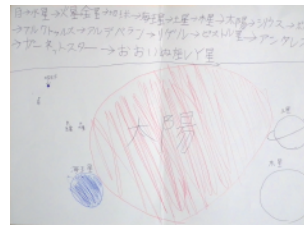


T君、2週連続でクワガタ発見! そんな虫取り名人の彼が自宅周

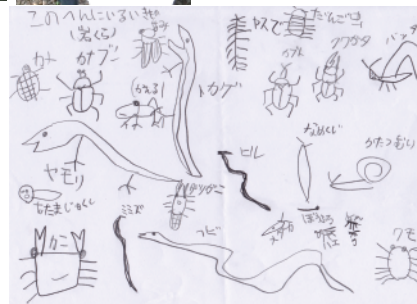
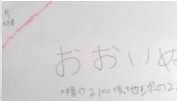


辺で見つかる生き物をまとめた絵は、図鑑のコーナーにもなりそうですね!

惑星の大きさ比較図を描き、おおいぬ座VY星の巨大さを伝えてくれた、宇宙博士H君の発表。



宇宙の不思議をこれからもクラスのみんなに伝えてくださいね!



● 耳を澄ませる (Bクラス)

五感のうち、4つまでは、目に見えないものにつながっている。いま見えているこの世界の大半は、実は、目に見えないもので成り立っている。——こんなふうに考えると、なんだかワクワクしてきませんか? 見えない世界に目を凝らすために、春学期では、目隠しをして森の奥へと探索しました(前号参照)。そして秋学期は、その流れで、「耳」に焦点を当てた取り組みをしています。ふだん何げなく遊んでいる場所で、目を閉じ、耳を澄まし、聴こえてきた音を一つひとつ、紙片に書き出していくのです。いわば、音を採集する、ということ。現在、公園、雨の園庭、森の奥の沢と、場所を変えながらコレクションしてきています。また、その紙片を持ち帰って、分類したり、対話したり、発表したりもしています。すると、思いがけない発見があるはずですが、でも、いちばん大事なことは、音をたくさん集めることではありません。耳を澄ませることです。そうして、目に見えないものへの感性を育むことです。さて、みなさんも一緒に、彼/彼女たちの真剣な息づかいに、耳を澄ませてみてください。



公園



雨の園庭



森の奥の沢



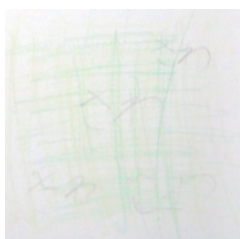
ずーるた ずーるた (M)
くーん (N) ぱっかん (N)
かさっ かさっ かさっ かさっ
さっ (Yk) キッ (Yk) クルル
ルルル (R) カチャカチャ
(K) ブルルルルルル (Yt)
ざわざわ (H) さささささ
(N) ずーさっ ずーさっ (M)
カーカー (K)



ピチピチポタトン (K)
サフ (R) テン (R) パララ
ラ パララ (Yk) けきよ
けきよ (H) ぶうん (H)
そーさそーささ (M)
ぐっかん (M) ピーポー
ピーポ (K) ぐーぐーぼっ
ぽ (N) タタタタタタタ
タタタタタタタ… (Yt)



きのっきのっきのっきの
のっきのっきののっ (M)
ぼとぼと きよきよ (N) ポッ
パッ (K) ぼちやん (H) ぴー
ぴっぴっぴっぴびび
びーひっ (N) ゴゴゴグ
グイー (Yt) チャチャ (K)
どぼどぼどぼど (Yk)
かかかかかかかか (M)



● みんなで描いた大作、完成！

みんながじっくりと真剣に取り組んでくれた結果、とうとう、春学期の全てを使うこととなった、各クラスの共同制作。夏休みを挟んで久しぶりに対面した、自分たちの大きな絵。そして、初めて対面する、別の曜日のクラスの仲間たちが描いた作品。そこには必ず、新鮮な発見や感動があるはずです。本誌の春学期号(P.3)でご紹介した、制作プロセスと共に、完成した作品及び発表会の模様をご覧頂ければ幸いです(本誌はバックナンバーも含め、HP上で公開致しております)。

Aクラス

海の色は、MちゃんとSちゃんの見事な連係プレーのたまもの。T君が描いた陸の生物は、下地のクレヨンが絵の具をはじめて独創的です。羽で空を飛ぶ生物は、Hちゃんのオリジナル。そして宇宙に浮かぶH君の太陽は、圧倒的な存在感を放っています。



Bクラス

夕焼けの空や雲の柔らかい表情、森の緑色を追求したIcちゃん。大好きな虫たちを散りばめたY君。そして、IyちゃんとTちゃんが空想してくれた森の音楽会には、沢山の動物たちが集まっています。



● ペン画に挑戦

この課題では、画材として、一般的な筆記具としてのボールペンを用いました。どのご家庭にもありそうな、何の変哲もない一本のペンだけで、一体どんな表現ができるのか。実は、線の強弱や、線を重ねる密度を工夫することで、無限の可能性をひらくことができます。クラスのみんなは、熱心な探求をつづけ、そのことを見事に証明してくれました。

Aクラス



今回、モチーフの観察を深めるため、大きめに描くことを勧めました。するとH君は、カタツムリの殻に、ヒビ割れ模様が沢山あることに初めて気づきました。鳥の羽の筋にあわせて気持ちよく線を走らせるSちゃん。葉の形を緻密に再現するHちゃん。ドングリを目

一杯拡大して描くT君。そして、小さな石を相手に、線の強弱や重ね方を何種類も研究するMちゃん。可能性は、様々です。



Bクラス



Icちゃんがモチーフとして選んだ罎目がちの鉱物は、一見ペンで描くのに適していそうですが、表面は金に光っていました。金色を黒ペンでどう描けばいいのか、彼女は考えました。「ここは光ってるから白くしておく。ここは黒くなってから、ペンで濃くぬる！」そうして描いた鉱物

を気に入ったのか、Icちゃんはそれを中心に園庭で拾った落ち葉を描きはじめてくれました。また、Iyちゃん、Tちゃんは、一枚の葉っぱの中にある色味や模様を様々なタッチで描き分け、Y君は、昆虫の姿を細部に至るまで再現してくれました。



『つくる』(A・B)

担当 福西亮馬



秋学期は、A、B クラスともダンボール工作を中心にしました。授業の様子は極力ブログでお伝えするようにしていますので、そちらをぜひご覧ください。

新しく入ってきた1、2年生には、作品を作りながら、道具の使い方にも一石二鳥で慣れてもらっています。自分の手でガムテープをちぎるという経験一つをとってみても、最初に教えた時よりも、次、またその次と、刻々とした成長ぶりが見られます。できることが増えていき、それがどんどんと自信に変わる様子をじかに見守っています。

3年生に、去年からの変化として見られることは、より大きな自主性です。去年は「できない」ということにくじけてしまいそうだった生徒も、今ではすっかり

りねばり強くなり、「こうするのが、つくるクラスなんや」と、新しく入ってきた生徒に教えてくれています。また指示がない時間でも、手を空いたままにせず、「こうしたらいいのところがかな？」と、より工夫を重ねる時間にくれています。むしろ自分で考えるその時間を、以前よりも積極的に楽しんでくれている「姿勢」が見られます。また、そのような生徒たちから、時に「ここが今、うまくいなくて困っているんだけど、どうしたらいいのでしょうか」と神妙に質問されることがあります。それをやって見せた後に、「なるほど！」という声が返ってくることで、こちら嬉しいことはありません。最初は何でも一足飛びにはいきませんが、人にしてもらってできることに甘んじる姿勢から、自立した姿勢へと、変わりつつあります。

このクラスでは、何を作っても間違いということはありません。「こんなふうにしたい！」という自らの動機で動いてくれる展開は、大いに歓迎すべきことです。もちろん社会性に反したり、危険性を伴わない限りですが、もしそうでないならば、「いいね！じゃあ、やってみたら？」と言うケースがほとんどです。その際、「こうすればうまくいき、こうすればうまくいかないことが分かった」という経験は、どんな小さなものでも、その生徒が思い出せる具体的な芯となり、肥やしとなります。

矩のりといえ、のり定規のことですが、いわば「心の欲するままに従って、その矩のりを越えず」がモットーです。何か開放的な気分を味わいたいから来るのではなく、ある種の緊張感を持って（時には錐で穴を開けるといった危ない作業を伴いながら）、新しい局面と一緒に挑戦するために集うのが、つくるクラスです。それを「よし」と思う小学生たちは、ぜひ！

秋学期の残りの回は、A クラスでは電線電話、B クラスでは紙飛行機に取り組みます。

(文責 福西亮馬)



『ことば』(1年生・4年生A・5年生・6年生)

担当 高木彬

今年もやってきました。「読書の秋」です。私が担当することばクラスでは、毎年だいたい秋から、小説を読んでいます。それも長編。絵本などの短篇は春学期にも読んでいるのですが、『ガリバー旅行記』、『銀河鉄道の夜』、『モモ』、『星の王子さま』といった長いお話は、振りかえればどれも秋から読んでいます。このことに気づいたのは、つい最近。これまでとくに意識してきたわけではなく——やはり「読書の秋」が、そうさせてきたのでしょうか。どのクラスも秋ごろになると、「よし、ここらで腰をすえて」というような、落ち着いた雰囲気になるのです。

“雰囲気”とは、目に見えないけれど、場を大きく支えるもの。私が山の学校の講師として大切にしていることのひとつは、この“雰囲気”を、いかにして育て、守るか、ということです。私はそれを便宜的に“小さな雰囲気”と“大きな雰囲気”とに分けて考えています。

“小さな雰囲気”というのは、「今日は雨が降っているから、なんとなくみんな元気ないな」などと一日単位で捉えた、クラスの一回一回の雰囲気のことです。これは、その日の一人ひとりの気分が強く影響します。春学期は、こうした“小さな雰囲気”をしっかりとつかむために、毎回、ことばについていろいろな切り口からアプローチすることが多いです。

“大きな雰囲気”というのは、こうした“小さな雰囲気”の積みかさねで生まれてくるものです。いわば“気運”のようなもの。それが、秋学期になるとだんだん高まってくるのです。そして、いったんその“大きな雰囲気”に包まれてしまえば、よほどのことがないかぎり、毎回の“小さな雰囲気”にはあまり揺るがない。毎年、秋学期から長編を読んできたのは、こうしたクラスの安定した雰囲気にながされてのことだったのかもしれませんが。

今年の秋は、1年生のクラスでは『オズの魔法使い』を読んでいます。まだ慣れない辞書を片手に、少しずつ。「本を自分で読めるんだ！」という自信を持ってもらうことが目標です。未知の言葉を辞書に発見したときの「あ！ あった！」という声のみずみずしい。俳句カルタづくりも春学期から続いています。

4年生Aのクラスでは、春学期の終わりから少しずつ『怪人二十面相』を読んでいます。これは生徒さんからのリクエストです。T君は、夏休みのあいだにこの『二十面相』のシリーズを何冊も読破したそう。推理しながら読む彼らは、さながら「少年探偵団」です。

5年生のクラスでは、イタロ・カルヴィーノの『マルコヴァルドさんの四季』を読んでいます。秋からクラスの人数が減ったのを逆手に、朗読後の対話や作文（添削）などに高い密度で取りくんでいます。リレー小説も春学期から続いています。

6年生のクラスでは、実は長編を読んではいません。書いているのです。でも、書いて書いて、もう3年目。“大きな雰囲気”に包まれっぱなしです。総執筆期間1年の『星の王子さま』は、いま山の学校カウンターで好評貸し出し中。つまりこちらは、年中つづく「芸術の秋」といったところでしょうか。

(文責 高木 彬)

『ことば』(2~4年生)

『中学ことば』

担当 岸本廣大

『中学・高校英語』

『歴史入門』(高校)

秋学期も、ひきつづき「ことば2~4年」、「中学ことば」、「中学・高校英語」、「歴史入門(高校)」の4クラスを担当させていただいています。この4クラスの取り組みからは、学ぶことの共通点に気付かされました。今回は、その共通点について、すこし考えてみたいと思います。

同じことを「くりかえし」ていく計算ドリルや漢字ドリル、誰しもが学校での勉強で経験したことでしょう。そして、大半の方はこうした勉強がつまらないと感じていたのではないのでしょうか。かくいう私自身もその一人です。私は子供の頃のこうした経験から、山の学校の取り組みでは楽しく学ぶことを第一に、クラスの内容を考えてきました。

しかし、改めて毎週の取り組みを振り返ってみると、私の担当するクラスの中でも、「くりかえし」は存在していました。「中学・高校英語」では、中学生も高校生も単語の確認を毎週「くりかえし」していますし、「中学ことば」では、漢検準2級程度の書き取り問題をほぼ毎週「くりかえし」しています。「ことば2~4年」でも、単調な漢字の書き取りとは違うことは自負していますが、「漢字迷路」という形式を「くりかえし」しているのは事実です。

このように顧みると、「くりかえし」とは学びの中で避けて通れないものではないかと、考えさせられます。一度聞いたり書いたりするだけで、漢字や単語を覚えられる天才はなかなかいません。覚えて理解するまで、ある程度の「くりかえし」が必要なのは、運動にも共通していえるでしょう。ただし、単調な「くりかえし」が子供たちを飽きさせ、学習の意欲を損なっては意味がありません。重要なのは、子供たちに楽しく「くりかえし」取り組んでもらうことです。例えば、上で少し触れた「漢字迷路」は、迷路を辿っていくと漢字が浮き出るようになっていきます。学校で一度は習った漢字でも、子供さんがこの「漢字迷路」に取り組む様子を見てみると、その意欲は決して低くありません。どうしても避けられない「くりかえし」を活かすには、同じことをするにしても、少し違う角度から取り組むという姿勢が必要なのです。さらに、「くりかえし」は自らを省みる機会を与えてくれます。「くりかえし」の中では、成長を実感することもできれば、欠点を再確認することもできるのです。学ぶ側からも(小学生にはまだ難しいかもしれませんが)、この点を意識することで「くりかえし」をより有意義に活用できるのではないのでしょうか。

「歴史入門(高校)」でもよく話題になりますが、歴史をたどっていくと、「くりかえし」とも思えるほど似たような状況が現れます。しかし、人々が「くりかえし」の中で少しずつ改善を積み重ね、様々な解決策を編み出してきたことも歴史は示してくれます。このように考えると、人は、漢字や単語といった知識だけでなく、人生で幾度となく突き当たる壁を乗り越える方法も、過去の「くりかえし」から学ぶことができるように思います。「くりかえし」の大きな可能性を念頭に置きながら、これからのクラスの取り組みも、生徒さんが楽しんで「くりかえし」てもらえるように決意を新たにします次第です。

(文責 岸本廣大)

『ことば』(2~3年生) 『調査研究入門』 担当 浅野直樹

前号の山びこ通信の巻頭文は“Less is more”でした。この2つのクラスはまさにその言葉通りだと解釈しています。どういうことかといいますと、しなければならぬ課題を与えるということは一切しておりません。すると不思議なことにかえってやるのがたくさん出てくるのです。

調査研究入門では夏休みに中間発表会をしました。そこで受けた質問に答えようとするのと調べたいことがあるのも出てきます。また、調べれば調べるほど気になる関連事項が見つかります。壮大になりすぎてどうまとめようかと途方に暮れるほどです。

ことば2~3年クラスでは、山の学校の周囲を観察して記録するという活動を契機にして、ある生徒はクワガタのことを語りだすと止まらなくなりました。それならばということで、壁新聞を作ってその圧倒的な情報を披露しようということになりました。

現時点ではどこまでまとめられるかわかりませんが、楽しく取り組んでいることは間違いありません。

(文責 浅野直樹)

『ことば』(4年生B) 担当 福西亮馬

今は特にお話作りが佳境です。生徒たちはしばしの間も鉛筆をおかず、頭の中からイメージを取り出すことにとても忙しそうです。

さてそんなある時、生徒たちがロクに「お話をずっと書きたい！」と言ったことがありました。授業時間を全部使って、という提案です。「だって、今書かないと忘れてしまうから！」と。私は、その言葉が聞けて本当は嬉しかったのですが、しかし「このクラスではできない」ということを伝えました。なぜなら、入ってくる言葉が少なくなれば、出ていく言葉も減ってしまうからです。これはかなり言い古されたことですが、「印象か表現かどちらが先か？」と問われれば、それは「印象が先」だと言わざるを得ません。表現とは、たとえるならそれは果汁のように、外からぎゅっと圧されてほとぼしるものことです。これは幼児期において、絵本を通して親の肉声が、その子供の新しい言葉となって出ていくのと同じです。そのように印象はいつでも補充し続ける必要があります。だからこそ「いつまでも書きたい！」という希望をかなえるためにも、本が有益な助けとなることを生徒たちに示唆しました。

とはいえ、お話を書くのが好きだということであれば、私が思うに、それにはそれに適した栄養源というものがあります。そこで秋学期は、長編から短編(詩と昔話)に切り替えました。短いゆえにプロット全体を見渡せ、それだけお話の素材に使ってもらいやすいからです。ただし、なるべく一人の作者のものを全集的に読むというスタンスは、春学期と変わらずに心がけています。たとえば詩では、一作者につき一つの詩というような「広く浅く」の付き合い方ではなく、今回は金子みすずと決め、その全集から、できるかぎり多くの詩を取り上げていきます。その際、有名かどうかという先入観は差し挟まず、続き物を読むような態度を取っています。詩は、どのみち一つでは味わえないものだからです。また昔話では、今はイソップ童話を読んでいます。それも有名な話であろうと、そうでない話であろうと、分け隔てなく一度は耳に入れておいてもらうことに、むしろ意味があると考えています。

この「耳に入れる」という作業は、たとえるなら、鈴の音を聞くようなものだと思います。つまり、二度目にそれを耳にした時に、「あれ？」という、不思議な音色となって聞こえることがあります。それと同じことです。その時になって、「あの言葉(音色)は一体何だったのだろうか？」と疑問に思ってもらえたなら、そして、自分から「確かめたい」と思って、何度となく出会った印象の奥にこそ、おそらく生徒たちが汲み上げるに最も適した表現が眠っているものと信じます。その時を楽しみに待ちながら、生徒たちの将来の言葉の泉の枯れることがないように、「ひとまず耳に入れること」が、このクラスでなすべきことだと考えています。

(文責 福西亮馬)

『かず』(1~2年生A・4年生B・5年生) 担当 福西亮馬

「ねえ先生、空のものは見ようとなさるのに、地上のものは見ないんですかい」 — 『イソップ寓話集』
(中務哲郎訳、岩波文庫)

天文学は、驚くべき発見で私たちの想像力を刺激し、喚起し、時に圧倒します。「真実は小説よりも奇なり」というのは、何も物騒な事件に限ったことではありません。自分は天文学者や物理学者ではないけれど、宇宙がどうなっているのか、私たちはどんな条件の中で生きているのかを知りたいと思う人はきっと多いことと思います。また知らないまま死ぬよりは、知ってから知りたいと強く念じている人も、中にはおられることでしょう。

数の世界がどうなっているのかを知りたいと思うことも、それと同じです。「この推論は成り立つのか?」「ど

うしてそのような結論に至るのか？」と。そこでもし、「こんなことを考えついたのは、私が最初なのではないか…？」とワクワクするような発見があるとしたら、それは人生における一大事でしょう。一方、それには困った側面もあります。だれも考えつけないとすれば、「確かめんとする者もまた、自分において他にはない」という事実です。さて、それ「だから」、踏み出せるのか。あるいは、それ「だから」、足踏みしてしまうのか…。その「だから」に、その人の考えるスタンスが認められると思います。

さて、各クラスでの個別的なことについては、山の学校のブログに書いていますので、そちらをご覧ください。ここでは、それらを鳥瞰したことを、私が授業の際に軸としている考えについて書きます。

まず、大きい視野としては、「考えることが楽しいと思えるならば、すでにそれが数学をしていることである」と私は考えています。「もしも」と問い、「であれば」と解く。「仮説を立てる力」と、それを確かめ終えるまで、手と頭の回転を休めない「ねばり強さ」。数学がもし人の役に立つとすれば、そのような知的体力を養うからだと思います。その意味では、まだ算数は嫌いになっておいてもかまわないのかもしれませんが、けれども、考えることが先に嫌いになってしまっただけでは、どうでしょうか。たとえ算数はやり過ごせても、遅かれはやかれ、数学を嫌いになってしまうでしょう。一体どちらが元手で、先に大事にされるべきでしょうか。少なくとも私は、考えることが好きであれば、いずれ算数やその先にある数学を好きになる、またそうなれるだけの資本はあると考えています。

さて、表題の言葉は、夜道、星ばかりを見上げて歩いていて古井戸に落ちてしまったという、とある天文学者の寓話です。それはターレスではないかとも言われており、ターレスと言えば立派な哲学者です。けれどもターレスでさえ、足元を見なければ古井戸に落ちてしまう、というのは、一つの真実でしょう。

けれども、星に気を取られること「だけ」が、いつもいつも非難されるべきでしょうか。私がここで注意を喚起したいのは、おそらくアイソポス（の名に帰せられる人々）は、同じ筆で、「足元ばかりを見ている人間」を非難する話も書けたら、ということです。『イソップ寓話集』は、「あちらが立てばこちらが立たぬ」、「ああも言えるしこうも言える」という柔軟な物の見方を示してくれています。そして、それができるかどうか問われているのは、数学も同じことです。「この可能性は考えたが、あの可能性はまだ考えていないのではないか？」と。つまりそれは果たして真実なのか？あるいはそうでないのか？と。

かけ算や割り算、筆算や面積や分数の計算が得意になること、文章題に自信を持てること、グラフや図形をかいたりすることは、これから「もっと考える」ために、いわば天文台を作るようなものです。視野を広げるための、大事な基礎工事にあたります。

けれども一方で、真実でないものを疑うこと、それもまた、生徒たちには健やかに芽を出してほしいと願っていることでもあります。

(文責 福西亮馬)

『かず』（1～2年生B）

『中学数学』（3年）

『中学・高校数学』

担当 浅野直樹

「何のために数学を勉強するのか」——これはよく聞かれる質問です。今学期もそれを聞かれたので、重複を覚悟しながら答えさせていただきます。

第一には数学を直接使う場面は意外にあるということです。買い物で計算をするのは言うに及ばず、家計簿をつけたり団体の会計をしたりすると結構複雑な数字合わせが求められます。方程式を解くように逆算して物事を考えることもよくありますね。化学や物理はもちろんのこと、経済や社会でも現象を記述したり予測したりするために関数表記をすることがあります。統計的な数字を目にすることも多いです。図形的な処理をする人は限られているかもしれませんが、デザインや測量などでは重要な部分を占めています。

これだけだと、「自分はそうした職業に就かないし計算などは電卓を使う」と言われてしまいます。そこで第二の理由が必要になります。それは思考力を鍛えるということです。数学は非常に厳密に体系化されているので、抽象的な思考力を鍛えるにはうってつけです。同じ事柄を幾何的、代数的、解析的にそれぞれ考えて、筋道が違っていても正しく手順を進めれば同じ結論に達します。多角的なものを見方を養うことにもつながります。

しかしこれはある程度数学を学んで初めて実感できることですし、何のために思考力を養うのかとさらに聞かれるかもしれません。そもそも「何のために」という問いは将来のために今は我慢して嫌なことをするという発想が前提になっていると考えられます。「何のために数学を勉強するのか」という問いを発するのを忘れるほど数学に熱中して楽しむというのが理想だと私は思います。

(文責 浅野直樹)

『かず』（4年生A）

担当 高木 彬

昨年度から担当させていただいているこのクラスも、はや2年目の秋をむかえました。実は昨年の4月以来、このクラスの取り組みはほとんど変わりがありません。『山びこ通信』のバックナンバーをご覧になればおわかりのとおり、ドリル（30分）＋「かずの探求」（15分）＋パズル（ex. まちがいさがし、迷路、タングラム：15分）です。また、取り組みの内容だけではなく、生徒さんの熱意も、変わることがありません。ドリルを解く30

分の、物音を立てることすらはばかれるような集中力と緊張感。昨年の4月に正した姿勢は、今もそのままです。変化はといえば、「かずの探求」がより生徒主体の取り組みになったことと、パズルにタングラムが加わったことの2点。これらはそのつど本欄でお伝えしてきました。

手もとにある昨年(2011年)の春学期の『山びこ通信』を開けてみると、これまで幾度も本欄で紹介してきた「かずの探求」について、「5、10、20、と続けて、かずの大事典をつくろうと考えている」と、私は書いていました。「こういう取り組みをしているのは、抽象的な記号であると同時に、具体的で身近な物質でもある、この「かず」というものの自体の魅力に興味をもてれば、との思いからです。行けるところまで行こうと思っています」(「かず3年生A」)。この初心もまた、変わりません。やがて彼女たちは、変わらず継続しつづけることが、どれだけ素晴らしいものを築きあげていくのかを、目の当たりにすることでしょう。現在「42」です。

毎週金曜日、いつもの時間になると、いつもの顔ぶれが、いつもの元気をたずさえて、いつもの教室に集まります。これの次はそれ、その次はあれ、あの次はこれ、というような、日々の小学校における目くるめく単元の移り変わりから一歩距離をとった、“変わらないもの”をあたためつづける場所でありたい。このクラスの生徒さんたちを見ていると、その思いを強くします。Hちゃん、Miちゃん、Moちゃん、Iちゃんは、そうしたものを大切にできる、私にとって尊敬すべき人たちです。

(文責 高木 彬)

『中学数学』(1~2年)

担当 福西亮馬

中学数学のクラスの人数が増えたことにより、浅野先生からの引継ぎで、浅野先生は3年生を、私は1~2年生の生徒を受け持つことになりました。それぞれの進捗状況に合わせた基本問題を渡し、時間の許す限りそれを解き続けてもらうという方針は、浅野先生の時と変わっていません。

M君とR君は、1年生の数式の復習から、1次方程式と1次関数へとすすんでいます。Mさんは、数式の復習から、連立方程式をしています。基本的な問題を解いてもらうと、それぞれに克服すべき課題が見つかります。またそれができた時は、その日の自信にして持ち帰ってもらっています。基本問題だからこそ、知らないと解けない問題が並んでおり、それを毎回、チェックすることになります。もし「分からない」と言う時は、もっと前の基本に戻ります。積み残しをなくすことがこのクラスの目的ですが、その積み残しのムラが、やはり数学に対する自信にも如実にあらわれていることを感じます。

幸い、生徒たちは戻ることには嫌がることはなく、「できる場所はどこか?」を一緒に見つけることで協力してくれます。そして「ここなら分かる」と言ってもらえたところから、また順を追って一緒に山登りを始めます。数学は、積み重ねとよく言われますが、あとはその階段を「細かく刻む」こと以外にありません。自分の分かるところと、分からないところの敷居はどこか? それを探すお手伝いをこのクラスではしているわけですが、いずれ生徒たちが自分一人でそれをできるようになれば、素晴らしいことだと思います。

分からなかったところは、後ろに戻れば、必ずできるところから始められます。繰り返すとしたら、そこです。ただし、山の学校の授業は、どんなに集中しても1週間に80分しかありません。それだけではもちろん不十分です。勉強の仕方は、教えている通りです。あとは、「やれやれ」と言った調子で終わりにせず、その日「分かった」ことが「また分からなくなった」とならないように、どうか家でも学校の教科書を開いて、積極的に「昨日したこと」の上にもまた「おとといしたこと」の蓄積を図ってください。

(文責 福西亮馬)

『中学英語』(1~2年生) 『英語一般』(論文) 担当 浅野直樹

粘り強く取り組みれば英語に慣れるということを実感しました。

中学英語1~2年のクラスではNHKラジオの基礎英語1を活用しておりまして、最初の頃は非常に難しく感じたものが、今では余裕を持って取り組むことができている。秋学期からこのクラスに入った生徒もすぐに慣れたようです。完璧を求めようとすると息苦しくなりますが、わからなくて当然だと開き直るとかえってわかるようになるものです。

英語一般クラスでは専門分野の論文を読むお手伝いをしています。専門分野の論文となると教材のような配慮はありませんし、それなりの分量にもなります。それでもこれまでに学んだ英語の知識でかなりの程度まで読むことができますし、その専門分野に通じていればさらに楽に読めます。

一人でやっていると慣れるというところまでたどり着く前にやめてしまうこともあるかと思います。山の学校は適度な強制力を働かせるという機能を果たしているとも感じます。

(文責 浅野直樹)

じつはエジソンは、ここ京都と深い関わりがあります。彼は、白熱電球のフィラメント（中央の発光部分）に、八幡の竹を使ったのです。ここでまず驚くのは、フィラメントに竹が使われていたということ。しかし、われわれ（？）にとってさらに驚くべきは、それが京都の竹だったということでしょう。

白熱電球を発明したのはエジソンではありません。エジソンは、すぐ燃えつきてしまうそれまでの電球を、飛躍的に改良したのです。電球が長く灯りつづけるためには、フィラメントにどんな物質を使えばいいのか。彼は、あらゆる物質で実験を繰り返かえました。その数、6000回。そして竹が、最もフィラメントに適していることを発見したのです（200時間）。しかし、ここで止まらないのが、エジソンのエジソンたるゆえん。竹は竹でも、どこの竹がいいのか。彼は全世界から1200種類もの竹を集め、さらに実験を繰り返かえました。その結果、八幡男山付近の竹が、最も長いあいだ光りつづけることを突きとめました（2450時間）。

以上が、彼の言う「99パーセントの努力」の内実です。世界から夜を消す大偉業は、こうした地道な積み重ねと、あくなき探究心のなせるわざだったのです。現在、電球のフィラメントには、タングステンという物質が用いられています。より長く、より明るく、という探究心が、後の世代の人々によって引き継がれた結果です。

山の学校の中学理科クラスに参加してくれている生徒さんたちは、そのバトンリレーの先端にいる、これからを担う方たちです。クラスの実験の時間に、実際にこの白熱電球をつくってもらったとき、フィラメントには、エジソンの時代には一般的ではなかった、でも今を生きる彼らにとっては最も身近な炭素、シャープペンシルの芯を用いました。ミノムシクリップで乾電池とつなぐと、黒い芯に電流が流れ、電気抵抗によって発熱し、光を放つのです。ガラス瓶のなかの輝きに、「うおー！」「すごい！」「きれい！」と感嘆の声があがりました。

シャープペンシルの芯など、彼らにとってはごく身近なものです。電球もまた、見慣れたものです。では、なぜ「すごい」「きれい」と感じたのでしょうか？ それは、「自分でつくった光だから」です。鉛筆の芯では太すぎて、煙は出ても、光らない。シャープペンシルの芯であっても、0.3mmよりも0.2mmの太さのほうが、明るい。でも、光り続ける時間は、0.3mmのほうが長い。そうやって、自分で試行錯誤したからです。

こうした実験の時間が、このクラスでは2週間に1度、やってきます。ドライアイス、爆鳴気、音が描く模様、フェナキスティスコープ、プリズムの虹、竜巻づくり……。数々の名場面をここに書ききれないのが惜しい。そうして先人たちの発見や感動の瞬間を迫体験すると、そこにいたるまでの探求と試行錯誤の楽しさ、実際に手を動かしてみるものの大切さが実感できます。実験のない週にクラスで取り組んでいる問題集の解答の先には、探求すべき世界がどこまでも広がっていることに、やがてハタと気づくのです。

(文責 高木 彬)

『ロボット工作』『ユークリッド幾何』

担当 福西亮馬

ロボット工作では、「なぜ動くのか」という素朴な疑問の答を得ようと、これまでブラックボックスだった部分により多くの光を当てることをしています。そのために、今まで市販の完成品を使っていたところを、より細かなパーツで別個に組んでいます。

秋学期の主役はトランジスタ(FET)です。トランジスタはその昔、真空管と呼ばれていた時代から今日まで改良が重ねられ、広汎な応用例を持った、とても基本的な電子部品です。その機能を理解するだけでも、おそらくロボットの勉強としてはおつりが来ることでしょう。そこで授業では、それを使った「Hブリッジ回路」というモーターを動かす仕組み(モータードライバー)を製作しました。

どうすれば手持ちの部品の中でいわば「最強」のモータードライバーを作ることができるか？ それを考えるとワクワクしてきます。「やりましょう」という生徒の意気込みを得て、何種類ものトランジスタのデータシートを見比べつつ、理論的な話と、はんだ付けの作業を並行して進めています。いつも80分があつという間ですが、可能な限り、失敗してみてください。その苦労は市販品では買えないものです。また配線の工夫にも挑戦し、そしてうまくいったものには、できるだけ多くの複製を作ってください。なぜなら複製する間に「こうすればもっとよくなるのではないか？」という「次の段階」が見えてくることも多いからです。同じ作業も、失敗と同じく、無駄ではありません。惜しむらくは時間ですが、それを補って余りあるだけの、あいまいな理解をなくすチャンスが得られます。そのようにして、いつか「トランジスタのことなら、自分に任せておけ」と胸を張ってもらえるようになればと思います。そして、納得のいくモータードライバーを作り終えたなら、それをいよいよ春学期に製作したマイコン基板に配線していきましょう。

ユークリッド幾何では、1年生には『原論』の第1巻の命題を証明してもらっています。前学期には、対頂角、錯角、同位角がそれぞれ等しいこと、また三角形の内角の和が 180° であることなど、最も基本的な定理を示してもらいましたが、今はそれらを駆使して、三角形の合同条件、また二等辺三角形についての定理を証明してもらっています。

1年生のR君は、ある時から、背理法による証明が得意になってくれました。背理法では、「AであるならばBであること」を示すために、まず「Bでない」という仮定をおきます。そして「Aでない」ことを導いて、「Aである」という先の前提と矛盾することを示します。つまり、その矛盾の原因は何だったのかとたずねると、そ

もそも「B でない」という仮定が間違っていたこととなります。すなわち「(A であるならば) B である」ことに他ならないわけです。どうして R 君がこの方法を気に入ってくれたのかは分かりませんが、とても大きな「勝ち癖」です。ぜひ自家薬籠中にした方法で、ばっさばっさと『原論』の命題を解き明かしていつてくれることを期待しています。

3 年生の A 君には、『原論』の第 4 巻から、垂直二等分線や、角の二等分線といったすでに学校で習ったことを手始めに、円の接線や三角形の内接円、外接円、正多角形の作図法を記してもらいました。これらコンパスと定規を使う話は、幾何でしか役に立たない蛸壺的な「技術」に思えますが、実は、有理数を係数とする方程式の解（「代数的」数とよばれるもの）と深く結びついています。そのような話もいつかできればと思います。今は第 6 巻にある「世界最古のアルゴリズム」と言われている、ユークリッドの互除法について議論しています。実は、先の作図法も、アルゴリズムの一種です。

アルゴリズムと言えば、「こうすればうまくいく」という一連の手順を書いたマニュアルのようなものですが、作図法にせよ、互除法にせよ、学校で習った時点では、「なぜそれでうまくいくのか」までは分からず、How（使い方）の理解で止まってしまっている生徒が多いのではないかと危惧します。一方で、A 君は、あくまで自分の納得のいく言葉で、なぜそれを切り口にして考えたのかというところまで解説を付した、哲学的な答案を書いてくれます。つまり、上の問題でも、根本的な Why のところまで掘り下げることにはやぶさかではありません。A 君にとって、そうした「議論」は、むしろうってつけなのだろうと思います。

またこのクラスでは、時折、数論的なトピックに触れることもあります。この間は、ABC 予想についてニュースが報じられましたが、その時はエラトステネスのふるいや素数の話を取り上げました。そのついでに（これは帰り際に A 君だけ残っていた時ですが）、ABC 予想からフェルマーの定理が証明できることも話しました。そしてガウスの「数学は科学の女王であり、数論は数学の女王である」という言葉を紹介するなり、A 君は「そのように数学って、一つにつながっているのですね」と答え、打てば響くようだと感じました。

（文責 福西亮馬）

『中学数学』(中 3)『中学・高校数学』担当 浅野直樹

(→8 ページ参照)

『調査研究入門』 担当 浅野直樹

(→7 ページ参照)

『中学ことば』『中学・高校英語』担当 岸本廣大

(→6 ページ参照)

『歴史入門』(高校) 担当 岸本廣大

(→6 ページ参照)

『将棋道場』

担当 百木 漠



8 月の将棋道場では夏休み恒例のトーナメント大会をおこないました。今回の優勝は Sho くん。Sho くんは現在、将棋道場でただひとりの 3 級で、最近ではほぼ負けなしの連勝を続けています。彼の強さはなにより攻撃力、とくに終盤の強さにあります。序盤や守りには不安定なところもあるのですが、いちど寄せにかかればほぼ勝ちを逃すことはありません。対戦中の集中力や負けた相手へのいたわりなど、上級者としての風格が身についてくるとさらに素晴らしいと思います。将棋は礼に始まり礼に終わるゲームであり、ただ将棋が強くて勝負に勝てば良いというものではなく、礼節をもって勝負に臨むことが重要とされます。将棋道場に来てくれる子供たちには、単に将棋が強くなるだけでなく、将棋にとりくむ際の礼儀や対戦相手への敬意などを身につけてもらえればと思っています。

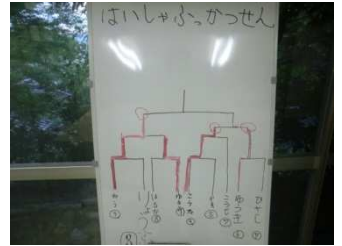
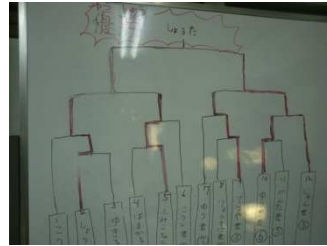


将棋では勝負がついた際に、勝った側が「勝った！」と言うのではなく、負けた側が「負けました」と宣言します。勝った側は「ありがとうございました」でそれに答えます。NHK の将棋番組などでご覧になった方もあるかもしれませんが、将棋では勝敗がついても対戦者は淡々としています。決して勝った側がガッツポーズをしたり、勝利の雄叫びを上げたりすることはありません。もちろんそれぞれの対戦者の心のなかではさまざまな感情が去来しているでしょうが、そういった感情を対戦者が表に出すことはほとんどありません。それが将棋の世界では美徳とされているからです。相撲などの日本の伝統文化に通ずる美徳ですね。(それゆえ、朝青龍がが一番に勝ってガッツポーズをした際にそれが問題となりました。その行

為への評価は人によって意見が別れるところだと思いますが…) 子供たちにも将棋の世界にそういった美德や礼節があることを知ってもらい、それを身につけてほしいなど考えています。

トーナメント大会の準優勝は Jun くん。Jun くんは全体的に将棋のセンスがよく、攻守のバランスがとれた将棋を指す印象です。将棋道場のなかでは珍しく振り飛車の使い手で、しっかりと囲ってから筋よく攻めていくタイプです。今後も、Sho くんの良いライバルであってほしいと思います。3位には Fumi ちゃん、4位には Tetsu くんのお姉さんコンビが入賞。毎回書いていますが、このふたりは着実に強くなっています。あえて言えば、ふたりとももう少し終盤力(寄せの力)が強くなればもっと勝てるようになるかもしれません。しかしこの点でも、ふたりは真面目に詰将棋の練習などにとりこんでいるので今後に期待したいなと思います。

今回の将棋道場では、子供たちがみないつもより集中してそれぞれの勝負にとりこんでくれたように思います。第一局が始まる前に「今日は一手指す前に、いつもより5秒長く考えてみて」という話をしたのですが、そのアドバイスをよく守ってくれました。一齐に「お願いします」で勝負が始まって、誰も一言も発さず、みなが盤面を見つめて勝負に集中をしているときは、教室全体の空気がびりりとしてとても心地よいものです。こういった集中の時間を、これからも作ってあげたいと考えています。



(文責 百木 漢)

——「一般」の部——

『山の学校ゼミ (社会)』

担当 中島啓勝

4月から新たに開講されたこの講座も、無事秋学期を迎えることとなりました。最初は「国際政治」を中心的なテーマにして受講者の皆さんと授業するなんてことが、果たしてできるのだろうかという半信半疑で開始したのですが、蓋を開けてみれば毎週とてもオープンで風通しの良い議論をすることができ、ホッと胸を撫で下ろしています。春学期はリアルタイムで起こっているニュースの解説に加え、東南アジアや中欧地域、アフガニスタンといった大国に翻弄されてきた地域の歴史や政治について学ぶことができました。普段なかなか馴染みのない世界についての知識を深めたことで、受講者の皆さんも国際情勢を更に多面的に捉える機会を得たのではないかと自負しております。と言いつつ、僕自身も知らないことばかりで非常に勉強になったというのが偽らざる本音だったりしますが…。

それにしても今年は、ヨーロッパを中心に起こっている経済危機や各国の指導者交代劇、そして東アジアを揺るがす領土問題と、政治や経済に関する非常に重要なニュースが毎日のように伝えられてきました。そしてそのどれもがこの先どのように展開していくのか不透明な、極めて深刻な問題を提示しています。改めて痛感することは、これからの国際情勢を深く理解していくためにはもはや個々の専門的な知が現行の枠組みの中で再生産されることでは不十分だという事実です。専門家さえも先を見通せないような事態が、それも複数同時に、複合的な形で進行するグローバル化の時代にあって、僕たちは何をどのように学び、日々の暮らしを守っていけば良いのでしょうか。

悩みは尽きませんが、現代ほど「ビッグ・ピクチャー」、つまり大まかな見立てが求められている時代もあります。社会の動きについて考えるということは、「偉い人」だけがやればいいことではありません。ほんの少しの勇気と好奇心を常識感覚さえ持っていれば、誰にでも参加できることです。自分たちの立場から見える景色を少しずつ拡張してみる。他の人の見ている景色がどのようなものか理解しようとしてみる。そして、乱暴な仮説でも構わないので、その混ざり合った景色に自分なりの縁をあたえてみる。受講者の皆さんには国際情勢をただ知識として学ぶだけでなく、それを素材にしながら「より面白いものの見方はできないか」という野心的な意識を持ってもらいたいと思っていますし、僕も毎回皆さんの見ている素敵な景色を共有させてもらえて嬉しく思っています。

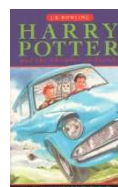
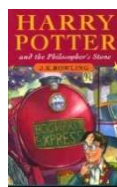
(文責 中島啓勝)

NEW!!

(冬学期
開講!)

『英語一般』(講読クラス)

日時 水曜日・午前 10:00~11:20
内容 ハリーポッターシリーズを読む
講師 浅野直樹(山の学校講師)



(講師からの一言)

あのハリーポッターシリーズを英語で読むクラスです。日本語で読んだときと違う印象を受ける部分も多々あります。原文は意外に大人向けだったりします。

『漢文入門』

担当 木村亮太

夏休みをはさんで、秋学期が始まりました。だんだん涼しくなってきた夕方に「はなれ」の教室に集まり、今学期も同じメンバーで机を囲んでいます。

このクラスでは、事前にお渡しした漢文のテキストについて、各自で辞書を引いたり、本文に附された注釈を利用して予習を済ませ、当日は適当な長さに段落を区切って、交互に発表を担当してもらっています。担当者は一遍本文の訓読（読み下し）をしたあと、その部分をどのような意味に解釈したかの説明を交えながら、現代日本語に翻訳していきます。そのあと、私も同じ箇所を訓読でなぞりながら、担当者がつまづいた部分や、読解の要点などを説明します。これで1巡、いつも2、3巡でアツという間に放課の時刻になります。

このとき、担当を外れたもう一人の方はただメモをとるだけではありません。予習ノートを見ながら、自分の解釈と違いがある場合にはどんどん発言をしてもらいます。遠慮してしまうと、自分にとって疑問が残るばかりか、クラスにとっても理解の発展につながりません。広範な知識と探求心を活かして様々な読みのアイデアを提案してくださるIさん、現代的な発想から議論のきっかけを作ってくれる好奇心旺盛なKさん。どれだけ正確に字義を理解したとしても、文章全体の解釈が丸きり同じにはなりません。1週間の準備をもとに三者三様の意見を出し合うと、予習のときより1歩も2歩も進んだ理解が得られる気がします。

今学期は『莊子』逍遙遊篇を読んでいます。この篇名に対する郭象（東晋・252-312）の注に、次のように言います。「夫れ小大 殊なると雖も、而れども自得の場に放たるれば、則ち物は其の性に任せ、事は其の能に称い、各おの其の分に当たり、逍遙たること一なり。豈に勝負を其の間に容れんや——自分の持ち前を活かせる場所で伸び伸びと過ごすことができているならば、それが他人と比べてどうかなどということを考える必要はない」。自分の持ち前を十分に発揮することが、それだけで素晴らしいことなのだと教えてくれます。

（文責 木村亮太）

『イタリア語講読』

担当 柱本元彦

今学期も引きつづき三名で講座を進めています。今回は、このところ毎年のようにノーベル賞候補にあげながら、半年ほど前にとつぜん亡くなったタブッキの作品、『黒い天使』のなかから最初の比較的長い短編を選んでみました。ひとつひとつのフレーズは難しくないのですが、独白の文章、いわゆる〈意識の流れ〉が綴られていて、視点や気分を変えながらうねうねとつづく文章は、いつまでたってもピリオドになりません。要するに、話者がどこで何に向かってどんな風に語っているのか、その語りかたを自分のなかで再現しながら読まなくては、わけが分からなくなってしまいます。舞台になっているピサの町を、ときどきは地図でたどりながら読むことも大切かもしれません。ところで今回、「このテキストに決めました」とメールで受講生にお知らせしたのですが、おもしろいことに（いや実に情けないことに）、黒い天使、イタリア語で *Angelo nero* を *Angero nero* と書いてしまいました。日本人に R と L の区別は難しいとはいえ（馴染みの単語でなければわたしもまだ間違えます）、天使、アンジェロをしくじるとは、われながらあまりと言えばあまりにひどいはず。それで考えてみたのですが、パソコンのキーボード操作で、カタカナ読みを書くときに、ラリルレロはいつも R を使わなくてはなりません。だからきつとついうっかり！カタカナでもよく書くような単語の落とし穴！ などと独りごち、似たような経験をした人はいないかと捜しはじめたところです。ともかく、こんな風に自己弁護して機械に責任をなすりつけたわけですから、この機会に長年使いつづけたノーマル・キー割り当てをはじめて変更し、la, li, lu, le, lo も ra, ri, ru, re, ro と同じく、ラリルレロに変わるようにしました。。。

（文責 柱本元彦）

『ロシア語入門』

担当 山下大吾

今学期の当クラスでは、前学期に引き続き、ナウカ出版の井桁貞義著『名作に学ぶロシア語：初歩から講読へ』を用いてロシア語の文法を学んでおります。受講生は変わらずTさんお一方、ようやく過ごしやすくなった昼下がりの離れの間で、毎週楽しくも真剣な授業が行われております。

Tさんのご努力のおかげで、当初の計画より速いペースで学習課程が進んでおり、そろそろ教科書を一冊「あげる」段階になってきました。この教科書の例文で挙げられたテキストはそのままロシア文学の原典から採用されたものですので、これまで習ったものを繰り返すだけでも味わいのある経験を得られるものと思われませんが、いよいよ本格的な講読の段階に入りつつあります。

教科書以外に私が参考資料として紹介する作品もあり、不定詞の無人称文の実用例として紹介したチュッチェフの詩を、Tさんはその異文の問題も押さえた上で暗記され、過日目の前で朗読して下さいました。「ロシアをただひたすらに信じること」、この詩の持つ内容と迫力をそのまま体現されたかのような見事な朗読でした。

今学期はこの先、教科書の巻末にあるプーシキンやレールモントフの抒情詩、ドストエフスキイやチャーホフの抜粋などに取り組むこととなります。愛好する対象を共にする相手と、その原典と一緒に味読する。その素晴らしい時間を今か今かと待ち望んでおります。

（文責 山下大吾）

『フランス語講読』

ひろなり
担当 武田宙也

フランス語講読では、今学期もダニエル・アラスの『絵画のはなし』を読んでいます。これまで本欄では、アラスの唱える「アナクロニズム」という概念に幾度か触れてきました。ここでアナクロニズムとは、さまざまな時間が混ざりあう事態や、そこから発する歴史観を指します。

アラスは本書のなかで、アナクロニズムを、いわば絵画を「よりおもしろく」読み解くための「道具」として用いているふしがあります。それは、厳格な歴史学の手法にのっとった絵画解釈というよりもむしろ、より自由な発想に重きをおくような絵画への向き合い方ということです。アラスにとって、「別な風に見ることはまた、別のものを見ることであり、それは新たな絵画史をもたらしことになる」のです。本書において、こうした、絵画を新たに楽しむための道具立ては、アナクロニズムに限りません。たとえば彼は、読者にたびたび絵画の「細部」への注意をうながし、細部を捨象する「遠くから見た絵画史」に対して、細部から出発する「近くから見た絵画史」を提唱します。

彼が細部にこだわるのには、いくつかの理由があります。たとえば細部には、画家の意図を超えたものが現れていることがあります。というのも、画家が絵を描くとき、通常はそれほど近くから（つまり、細部がありありと把握できるほど近くから）見られることを想定しなかったからです。こうして、近くから見ることにより、「見られるために描かれたものではないもの」を確認することができます。いわば細部には、画家の「よそ行きの顔」とは違った面が現れているのです。アラスはそれを、画家の「内密性 [intimité]」と呼びます。近くから見ることによって、画家の内面により近づくことができるのです。

あるいは細部には、絵画の「起動の [inchoatif]」状態、すなわち、絵画がいまだはっきりしたイメージにまともっていない状態を見ることができます。そこではまだ、たんなる絵の具の染みや流れに過ぎないものが、いかなる形象もなしていないのです。この細部は、絵画の有機的な統一性を支えることなく、反対にそれを解体するものです。しかし一方でわたしたちは、この絵画の「破壊者」たる細部に、どうしようもなく魅惑されるのです。

アラスによれば、細部とは、「絵画を見る各人によって生みだされる」ものです。絵画の全体にそぐわず、あまつさえそれを掻き乱す細部はまた、絵画を前にしたわたしたちの想像が自由に溢れ出すきっかけともなるのです。

(文責 武田宙也)

『英語一般』(論文) 担当 浅野直樹

(→9ページ参照)

『ラテン語講読』(初級 A・B・D)

担当 山下大吾

ラテン語散文の鑑と言われ、ひいては英語を始めとする近代諸言語の散文や構文にも多大な影響を与えているキケローの諸作品。A クラスでは、その代表的な弁論である「カティリーナ弾劾」に取り組んでおります。受講生は引き続き A さんと H さんのお二方です。前学期中に、カティリーナ当人を弁論の相手とした第一演説を読み終え、今学期は第二演説を読み進めています。

スタイルはローマ市民に対してキケローが語りかけるものになり、今もローマ市内に居座り続ける、カティリーナの残党に対する警戒の目を怠らぬよう繰り返し注意を喚起しています。7 節では残党一味の具体的な内容について述べられていますが、「悪漢」に相当する言葉の列挙たるや凄まじく、殺し屋や詐欺師、盗賊を始めとして、その数は名詞だけで 12、形容詞を入れれば 14 にも及びます。常日頃語彙の貧弱さに悩まされる身としては、これだけの芸当を目の当たりにすると何ともやりきれなくなるのが正直なところですが、目指すべき見事な *exemplum* に出会えたことを多としなければなりません。

B クラス、並びに今学期途中から開講されたばかりの D クラスでは、哲学的対話篇の一つ『老年について』を読み進めております。受講生はそれぞれ T さんと C さんのお一方ずつです。B クラスでは全体の 3 分の 1 強に当たる 34 節まで進みました。授業では、老年における体力の持つ意味などその内容面のみならず、T さんのご専門の関係から、現代ヨーロッパの言語の観点からラテン語の特徴を浮かび上がらせる言語的なテーマもしばしば話題になり、私も大変刺激を受けております。

(文責 山下大吾)

『ラテン語講読』(初級 C)

ゆたか
担当 前川 裕

このクラスでは、セネカ『ルキリウスへの手紙(倫理書簡集)』を継続して読んでいます。今学期は第 47 書簡から読み進めています。受講生は引き続き参加していただいているお二人で、1 回当たり Loeb のテキストで 15 行前後を宿題とし、単語調べや訳を準備いただいた上で、授業において順番に読んでいます。授業では訳読をしながら、基本的な文法事項を随時チェックし、基礎知識を確認しています。日本語訳や Loeb の英語訳も時に参照しつつ、ラテン語原文と訳との相違点やその理由などを考えています。

セネカの書簡は実際の手紙ではなく、創作による文学作品と考えられています。その内容はたいへん面白いものです。今も昔も変わらない人間の性質を暴き出しています。第 47 書簡は奴隷についての話でした。これを読むと、当時の奴隷の扱い方がよく分かります。恐怖心によって強圧的に支配するのが一般的であったようです。しかしセネカはそのようなやり方に反対します。セネカによる「彼らは人間 (homines) である」という言葉は、逆に主人たちが奴隷を人間として扱っていなかったことを表します。セネカはさらに「彼らの心は自由人かもしれない」と述べます。人間を人間として見なすこと、またその心において全ての人は自由であることを明示していることは、今の時代にも通じる内容だと強く感じます。

テキスト読解が終わったあと、余った時間ではおまけの話として、西洋古典に関する話題を提供しています。今期はギリシャ・ローマの書籍事情や、古代の教育について紹介をしました。

次学期も引き続きセネカの予定です。初級講読は、初級文法修了程度(独学でも構いません)でご参加でき、参加者に合わせた進度で進めます。興味を持たれた方はぜひごお問い合わせください。

(文責 前川 裕)

『ラテン語入門』『ラテン語講読』(中級) 担当 広川直幸

入門では、Hans H. Ørberg, *Lingua Latina II: Roma aeterna* を教科書にしてラテン語を学び続けている。今学期で四年目に入った。一回に 100 行進むことを目標にしながら、今は第 44 課を学んでいる。授業名はラテン語入門のままにしてあるが、内容は講読とあまり変わらない。学習者に配慮して読みやすく書き改められた Livius を読みながらラテン語とローマ史を学んでいる。もうすぐ Servius Tullius の治世が終わり、かなり手強い練習問題が始まる。読解中心の教科書で学んでいると、語形態の正確な分析がおろそかになりがちなので、必要に応じて、曲用・活用の復習をしてもらいたい。

中級講読では、前学期まで読んでいたウェルギリウスの『アイネーイス』を一旦中止して、今学期から人文主義の父と呼ばれるペトルルカの『わが秘密』(SECRETUM) を読み始めた。ルネサンスの人文主義者は古典期のラテン語への回帰運動を起こし、殊にキケローを模範としたので、ペトルルカのラテン語も古典期のラテン語を知っていれば大体読むことができるが、ペトルルカはルネサンス初期の人なのでまだ中世ラテン語の名残を多く留めており、その辺りがまた面白い。ルネサンスの人文主義 (umanesimo) とは何だったのか、あるいは人文主義の人間 (uomo) とは何だったのかという疑問を心の片隅に持ちながら、しばらくペトルルカを読み続ける予定である。

(文責 広川直幸)

『ギリシャ語入門』(A・C) 担当 広川直幸 『ギリシャ語講読』(初級A・初級B・中級)

入門 A では、昨年春から Peckett & Munday, *Thrasymachus* を用いて古典ギリシャ語の基礎を学んできた。この原稿を書いている時点で教科書は残り約一課である。およそ一年半の道程になったが、無事に教科書を終了することができそうである。その後は受講生の希望で『新約』の「マルコによる福音書」を読むことになった。易しいギリシャ語を読むことで語彙を増強し文法を定着させることが目的である。

入門 C は、水谷智洋『古典ギリシア語初歩』を一回一課のペースで進めている。今学期は第 25 課から最後の第 36 課までを扱う。途中で一学期分休みを挟んだりなど色々あったが、何とか最後まで漕ぎ着けた。とはいえ、今はひょろひょろの骨組み(パラダイム)が辛うじて立っている状態なので、易しいものを色々読んでしっかりと肉(語彙)を付けてもらいたい。

初級講読 A では、『オデュッセイア』を読んでいる。一回に進む量は 30 行程度。もうすぐ第 1 歌が終わる。だいぶ慣れてはきたものの、まだ韻律に苦しんでいる感じがある。もう韻律分析は十分できるようになっているので、気を付けるべきは後一つ、すなわち「韻律単位に引きずられて、語句を切断して朗読してはいけない」ということのみである。叙事詩独特の語形態などはよく調べてきてくれているので、この点を何とか乗り越えてもらいたい。来学期も『オデュッセイア』を読み続ける。

初級講読 B では、プラトンの『饗宴』を読んでいる。一回(2 コマ)に進む量は OCT に換算して 2~3 ページである。講読初年度にしては健闘していると思う。教科書は Louise Pratt, *Eros at the Banquet* である。初学者向けに易しく書き改められた部分はすでに読み終えたので、今は原典のまま読んでいく。ちょうど、球状人間についてのアリストパネースの奇想天外な演説を読み終えてアガトーンの演説に進もうとしているところである。来学期も『饗宴』を読む。ちなみに、この授業では講読と平行して North & Hillard, *Greek Prose Composition* を用いて簡単な作文の練習もしている。

中級講読では、トゥーキューディデースを読んでいる。授業では Alberti の校訂本を用いているが、OCT に換算すると一回に 2~3 ページという良いペースで進んでいる。現在は第 2 巻の開戦初年度の記述を読んでいる。もうすぐ初年度を締めくくると、ペリクレースの国葬演説が始まる。

(文責 広川直幸)

『会員の声』

『イタリア語講読』（月曜日 18:40～20:00）

昨年12月よりイタリア語講読クラスに参加させて頂き、もうすぐ1年になります。毎週月曜日の夜、離れの教室に集まるのは三人なのですが、このクラスは実際のところ先生二人に生徒が一人といった趣です。なぜなら、私以外のもう一人の生徒が、ラテン語やギリシャ語を教えていらっしゃる広川先生なのです。私が参加するまでは、柱本先生と広川先生のお二人で進めておられた由。これはいわば、プロのヴァイオリニストとチェリストが手合わせをしていたところに、楽譜もきちんと読めないアマチュア奏者がノコノコとやってきたというようなものです。（受け入れて下さってありがとうございます。）それなのに、私が自分のレベルも顧みず「物語文は、いまいち理解できなくてもなんとなく意味が推測できてしまうから、きちんとイタリア語が理解できていないと読めない、というようなテキストがいいです」などと口走ってしまったもので、昨冬は哲学系の随想がテキストとなりました。柱本先生は、「エッセイだから。寝転がって読むようなものだからね。」「テーマは孔子と論語ということで、内容はご存じのとおり」などと優しい口調で仰ったのですが…。読み始めると、イタリア語の難しさと曖昧さ、日本語でも私には理解不能であろう難解な言い回し、突然挟まれる予想外の作者コメント、棘のある厭世観が見え隠れ…寝転がって読むどころか、膝に重石を載せて正座を強いられているかのようでした。

しかしながら、この感覚はいつか体験したものだと考えて思い当たりました。十数年前、大学入学直後の1回生の前期、一般教養の英語クラスのテキストがジル・ドゥルーズの「ニーチェと哲学」の英訳版だったのです。いわゆるポストモダン思想の複雑怪奇な文章を解説せねばならず、酷いな、大学の授業というのは学生のレベルを考慮しないのだなと思うと同時に、これは現代教養の世界への扉なのかもしれないと心を熱くしたものでした（その扉は不精な私には開かれませんでした）。講師の先生は「今の貴方達には全く理解できないかもしれない。でもきっと、十年後、二十年後に思い出すこともあるでしょう」と仰っていたのですが、こんな形で思い出すことになるとは…。

話が逸れてしまいましたが、このイタリア語講読クラスは私にとって、本当に他に得難い貴重な場です。市井のカルチャースクールの語学クラスでは、スペイン系ユダヤ人思想家がドイツ語で書いた中国思想についての随想のイタリア語訳がテキストになることなんて、絶無でしょう。また、予習をさぼる余地もないし、思ったことはすぐ口にできますし、何がわからないのか自分でもわからず疑問点をきちんと説明できない時でも、先生は的確に汲み取って丁寧に答えて下さいます。そして、「ラテン語ではどうでしょうか、広川先生？」「そうですね、ラテン語では…。二人のプロフェッショナルと一緒に学ばせて頂き、こんな有難いことはないなあ、と思う毎回の授業です。ちなみにテキストはその後も、広川先生と私のリクエストを一ひねり、二ひねりした興味深いものを頂いています。

というわけで、私と同じようなレベルのメンバーが一人くらい増えてほしいような、このまま一人で幸運を享受しておきたいような、複雑な気持ちで、毎週、石段を登っています。

（『イタリア語講読』受講生 N.H さん）

山の学校・時間割（秋学期）

時間割以外にもご希望のクラスがございましたら、お気軽にお問い合わせ下さい

注：冬学期の時間割につきましては、冬学期申込書をご覧ください。

	午前(9:10-15:30)	1(16:20-17:20)	2(17:30-18:30)	3(18:40-20:00)	4(20:10-21:30)
月	将棋道場(p11) (月1回 16:00~18:00)	つくる A(p5) (16:30~18:00 隔週)	漢文入門(p13) (17:00~18:20)	イタリア語講読(p13)	ラテン語入門(p15)
火		しぜん A(p3) かいが A(p4) (15:50~17:20 隔週) かず1~2年A(p7)	ことば2~4年(p6) ことば6年(p5)	中学ことば(p6) 英語一般(論文)(p9) ギリシャ語入門 A(p15)	中学・高校英語(p6) ギリシャ語初級講読A(p15) 調査研究入門(p7)
水		つくる B(p5) (16:00~17:30 隔週) ことば1年(p5) ことば2~3年(p7) 山の学校ゼミ(社会)(p12) (16:00~17:20)	かず1~2年B(p8) ことば5年(p5) かず5年(p7) (17:45~18:45)		中1~2数学(p9) 中3数学(p8) 歴史入門(高校)(p6) ラテン語初級講読 A(p14)
木	ラテン語初級講読 B(p14) (14:10~15:30)	しぜん B(p3) かいが B(p4) (15:50~17:20 隔週)	ひねもす道場 (月1回 16:00~18:00) ウェブプログラミング入門 (17:10~18:30 隔週)	中1~2年英語(p8) ギリシャ語入門 C(p15)	中学・高校数学(p8)
金	ロシア語入門(p13) (14:30~15:50)	ことば4年A(p5) ことば4年B(p7)	かず4年 A(p8) かず4年 B(p7)	中学理科(p10) ギリシャ語中級講読(p15)	ロボット工作(隔週)(p10) ユークリッド幾何(隔週)(p10) ラテン語初級講読 C(p14) ラテン語中級講読(p15)
土日	フランス語講読(p14) (日 9:10~12:00 隔週)	ギリシャ語初級講読 B(p15) (第2・4土 14:00~17:00 隔週) ラテン語初級講読 D(p14) (日 14:00~15:20)			

—本誌を手にとり下さった方へ

山の学校は、小学生から大人を対象とした新しい学びの場です。“Disce libens. (楽しく学べ)”がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです（春学期は6月、秋学期は11月、冬学期は2月）。ホームページでも、クラスの様子やイベント（毎月開催・無料）の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない！もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

TEL: 075-781-3215

FAX: 075-781-6073

E-mail: taro@kitashirakawa.jp

http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko

